

第五章 恐怖と排除 『坊つちやん』

『坊つちやん』は、確かに「田舎」差別小説だが（注1）、その底辺には「田舎」という他者への恐怖と恐れがある。つまりそこにある「差別」は単なる優越感ゆえのものではなく、始めて接する他者への恐れゆえのものであり、だからこそ絶えず「坊つちやん」は自己言及を通じた自己画定への欲望から逃れられないのである。

それは「田舎」側にしても同様で、彼らの「坊つちやん」への感情は劣等感などではなく、むしろ対等な立場として「坊つちやん」を脅かしているとするべきだ。いわゆる「田舎」が江戸＝「都会」より劣っているというような認識は「坊つちやん」の時代にはまだ定着していなかった。当時はまさに都会以外の地域を「田舎」と規定し、いわゆる地域差（このような、場所の差異化はやがて人間の、人間による差別と搾取を生むだろう）を産みつつある時期だったのである。

当時の「田舎」はまだ「坊つちやん」が考えるように「東京」への憧憬を持ってはおらず、従って劣等意識など持ちようもなかった。江戸時代、「江戸」とは「あくまでも全国を統一した「徳川の城下町」であったにすぎ」ず、明治時代に入って周知のとおり「江戸」は「東京」となって近代都市化への道を急速に進みながら他地域との差異化を図ったのだが、『坊つちやん』が背景にしている明治三十七 三十八年はその差異化はまだ決定的なものではなかったのである（注2）。

「勝つ」ことへの執着を見せる「坊つちやん」が、結局は「敗北」に追いこまれるのもそのためだと言っていい。『坊つちやん』は、都会っ子「坊つちやん」が、「田舎」とみなしたかった地域において過剰な自己誇示をし、制圧しようとしては、地域の反撥を受けて逃げ帰る物語だと言っていい。

本論ではそのような枠組みのうえに立って、都会っ子「坊つちやん」の差異化への欲望が田舎嫌悪＝田舎フォビアとでもよぶべき感性として現れ、同時に「田舎」側の東京嫌い－江戸軽蔑が展開される様相を追ってみたい。そして、そのような田舎嫌悪が、「田舎」を同一の「日本」と認めたくないというような、ナショナル・アイデンティティ意識から派生したものであることも合わせて見ておきたい。

一．「東京」という中心

「坊つちやん」は、「生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許り」(一)というような人物である。そのような「坊つちやん」が「大変な遠くへ行かねばなら」なくなったことがこの物語を展開させる機軸となっている。〈移動〉を余儀なくされた場所が「坊つちやん」には地図の上で「針の先程小さく」見えるのだが、それだけで「坊つちやん」はそこを「どうせ碌な所ではあるまい」と断定する。続いて「坊つちやん」が「どんな町で、どんな人が住んでるか分らん」けれど「分らんでも困らない」(以上、一)と、無関心を露わにするのもおそらくそこが「小さい」田舎だからだと言っている。つまり「坊つちやん」のなかにははじめから「小さい」ことにたいする軽蔑が存在していたのである。

「東京」と「鎌倉」以外に外を見たことのない「坊つちやん」は「田舎」へやってきたとき、そこに存在するすべて 人やものを、〈大きさ〉や〈立派さ〉における「東京」との比較においてしか見ることができない。初めて目に入った「田舎」は「坊つちやん」には「大森位な漁村」(二)でしかないのだが、「猫の額程な町内」(二)という表現もまた「東京」の「町内」との比較によるものであろうことは次のような文章からも伺える。

夫から学校の門を出て、すぐ宿へ帰らうと思つたが、帰つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやらうと思つて、無暗に足の向く方があるき散らした。県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵営も見た。麻布の聯隊より立派でない。大通りも見た。神楽坂を半分に狭くした位な道幅で町並はあれより落ちる。廿五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んで御城下だ抔と威張つてる人間は可哀想なものだと考へながらくると、いつしか山城屋の前へ出た。広い様でも狭いものだ。是で大抵は見尽したのだらう。(二)

「坊つちやん」は初めての場所を前に「大森」に続いて「麻布」や「神楽坂」を思い起こしている。『坊つちやん』はある意味で東京の読者を想定した内輪小説と断言してもいいほどに東京の地名を連発し、その優位を強調しているのである。

学生とのいざござは天麩羅そばを食べたことがきっかけだったが、そのそば屋が「坊つちやん」の目に入ったのも「郵便局の隣りに蕎麦とかいて、下に東京と注を加へた看板があつた」(三)からだったことは、入って見るとそこは「看板程でもな」かつたという述懐から知れる。「東京と断はる以上はもう少し綺麗にしさうなもの」と考えたり、「滅法きた

な」いのは「東京を知らないのか、金がないのか」ゆえのことと見えることは、「坊つちやん」の選択基準があくまでも「東京」にあったことを示していよう(注3)。すべてを「東京」を基準に考える「坊つちやん」にそこが、温泉以外は「東京の足元にも及ばない」(以上、三)ところとして片付けられるのは当然なのである。

そのような「坊つちやん」だからこそ、「わざ／＼東京から、こんな奴を教へに来たのか」(三)「人を馬鹿にしてらあ、こんな所に我慢が出来るものか」と考え、「東京はよい所で御座いませう」(以上、二)と聞く旅館の下女に「当たり前」と自満気に「云つてや」るのである。

冗談も度を過ごせばいたづらだ。焼餅の黒焦の様なもので誰も賞め手はない。(略)一時間あるくと見物する町もない様な狭い都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争の様に触れちらかすんだらう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねつこびた、植木鉢の楓見た様な小人が出来るんだ。無邪気なら一所に笑つてもいゝが、こりやなんだ。小供の癖に乙に毒気を持つてる。(三)

確かに、学生たちが「天麩羅事件を日露戦争の様に触れちらかす」のはそこが「狭い」ゆえの、人口比に対する、扱うべき情報量不足ゆえのことであろう。すでに近代化を成し遂げつつあった東京で多くの情報に晒されてきたはずの「坊つちやん」ならではの的確な批評と言えるが、それをまともな「教育」を受けてないせいとしていることに注目しておこう。

ともかくも、「どうも狭い土地に住んでるとうるさい者だ」「何でこんな狭苦しい鼻の先がつかへる様な所へきたのかと思ふと情けなくなつた」(以上、三)と考える「坊つちやん」が、人までをも「植木鉢の楓見た様な小人」と、その<小さ>さにおいて見てしまうのは、「坊つちやん」の思考が<大きさ>志向であることを証明している。

そのような「坊つちやん」の思考は体験を重ねるにつれて硬直性を増し、「大方田舎だから万事東京のさかに行くんだらう」(六)というふうに東京と田舎を対極におくことでそこを対極的な場所として表象するようになる。そして、「大方江戸前の料理を食つた事がないんだらう」(九)というように「江戸」的ものの体験を絶対化し、しまいには「こんな者を相手に喧嘩をしたつて江戸つ子の名折れ」(七)と、<対等>でないことを強調するようになるのである。

しかし、そのような「坊つちやん」の東京中心主義は、「中心」なしには思考できないという点では、赤シャツの「誰を捕まへても片仮名の唐人の名を並べたがる（五）こと（「坊つちやん」はそれを「わるい癖」と批判し「少しは遠慮するがいゝ」と言っていたのだが）における西洋中心主義と同じ次元のものである。赤シャツの西洋中心主義には気が付いていても、「坊つちやん」は自己の「東京」への執着や東京中心主義には気がつかないのである。そして実はそのような「中心」主義こそがある地域を「田舎」とし、＜周辺化＞するものなのである（注4）。レイ・チョウは、「文明人のアイデンティティは、つねに他者性を通じて獲得される」（レイ・チョウ『ディアスポラの知識人』85頁、青土社、1998・4）と指摘しているが、実は、他者性を通じて獲得されるのは「文明人」だけではない。しかし、『坊つちやん』においては当てはまる指摘ともいえるだろう。

二、「廿五万石」の「都」

ところが、問題はそこが実は「坊つちやん」自身、「一時間あるくと見物する町もない様な狭い都」で、「廿五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んで御城下だ杯と威張つてる人間」（二）がいると言っていた言葉に現れるようにあくまでも「都」であり「御城下」だったということにある。つまりそこは単なる「田舎」ではなかったのである。「坊つちやん」が絶えず「大きさ」において比べ、そこの人々を「弱虫」と断定しつつ「力」の優位を確認せずにはいられないのはまさにそこに理由があると言っていい。もともと「坊つちやん」は「弱虫」を極端に嫌悪し忌避していた。「坊つちやん」が二階から飛び降りて腰を抜かす事態に至ったのも挑発的な言葉とともに「弱虫やーい。と囃」（一）されたからだったし、自己の「弱虫」でないことを誇示するために自己身体への暴力さえも厭わなかった「坊つちやん」にとって人の価値がまず「弱虫」かどうかにあったことは当然だろう。だからこそ「坊つちやん」は質屋の息子「勘太郎は無論弱虫」（一）と根拠もなしに規定するのだし、勘太郎の「盗み」に怒るのはそれが「弱虫の癖に」（一）行われたと考えられたゆえのことと見ていい。下宿生活の時の下の書生に対する評価も「書生なんでものは弱い癖に、やに口が達者」（四）というようなものであった。

そのような「坊つちやん」が「田舎」へ行ってからも「弱虫」という基準をいたるところで当てはめるのは当然といえる。たとえば中学の生徒に暴力を行使しては「二三度こづき廻したら、あつけに取られて、目をぱちへさせ」る学生に「さあおれの部屋迄来い」

と命令しては、学生が付いてくると「弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た」(以上、四)と考えるのである。「教頭」もやはり「坊つちやん」には「公然と名前が云へない位な男だから、弱虫に極まつてる」(六)と決めつけられるているのだから、「坊つちやん」にとって他者に対する最高レベルの罵倒は「弱虫」ということだったのだろう。

「坊つちやん」が生徒たちに「べらんめい調」(三)で「講釈」していたのも実は「こんな田舎者に弱身を見せると癖になると思」ったからであった。そしてそのような態度に出たのは「江戸っ子で華奢に小作りに出来て居るから」、「高い所へ上がつても押しが利かない」からだった。生徒の姿も「一番強さうな奴」(以上、三)といったように、力に関する事項から目に入る「坊つちやん」の他者への視線が絶えず<力>の確認と<制圧>にあることが確かめられる。

早くから「勝つ」(四)ことへの執着を見せていた「坊つちやん」が(兄に将棋で負けそうになった時の逸話はその一例である)「どうしても腕力でなくつちや駄目」で「世界に戦争は絶えない」のを当然とし、「個人でも、とどの詰りは腕力」(以上、十一)と考えるのはむしろ当然のことである。

時代は戦争の時代である。「坊つちやん」が「弱虫」という言葉に敏感だったのは時代が<力>を求め、それを発現してくれる「男」を求めていたからだったのではないか。そしてそのような<力>が疑われなかったのは、「野蛮」は<征服>されていいという文明中心主義が その「文明」は近代化を先取りした「東京」にあるはずだった そこにあったからである。

しかし、「坊つちやん」が「田舎」扱いをして制圧したくともそれは思うように簡単なことではない。そこは「廿五万石」の「御城下」なのだから。だからこそその「城下」人たちもまた江戸人への対抗意識をもやし、いじめ、「江戸」の表象を差別の正当化に利用さえもするのである。

宿直の時の「坊つちやん」の独白を見よう。

正直に白状してしまふが、おれは勇気のある割合に智慧が足りない。こんな時にはどうしていゝか薩張りわからない。わからないけれども、決して負ける積りはない。此儘に済ましてはおれの顔にかゝはる。江戸っ子は意気地がないと云はれるのは残念だ。宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、手のつけ様がなくなつて、仕方がないから泣寐入りにしたと思はれちや一生の名折だ。是でも元は旗本だ。(四)

野だの様なのは、馬車に乗らうが、船に乗らうが、凌雲閣へのらうが、到底寄り付けたものぢやない。おれが教頭で、赤シャツがおれだつたら、矢つ張りおれにへけつけ御世辞を使つて赤シャツを冷かすに違ひない。江戸っ子は軽薄だと云ふが成程こんなのが田舎巡りをして、私は江戸っ子でげすを繰り返して居たら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思ふに極まつてる。(五)

『坊ちゃん』では、実は江戸っ子が一方的に「田舎」を差別していたのではない。実は「田舎」もまた江戸っ子に対して「軽薄」というようなイメージを持っていたのだし、「江戸っ子」「坊つちゃん」は、その表象が根付くことを恐れている。それだけではない。「江戸っ子」である自己証明として「坊つちゃん」が選んでいた「べらんめい」調もまた、単に「優越性」の表象ではないのだ。

ぢや演説をして古賀君を大にほめてやれ、おれがすると江戸っ子のべらんめいになつて重みがなくていけない。(九)

「江戸っ子」はまだ、自明の<権威>ではない。「べらんめい」は確かに「江戸」を表象するが(注5)、同時に「べらんめい」の「軽薄」でもあったのだ。そして「坊つちゃん」自身が言うように江戸は「喧嘩の本場」(十)でもあったわけで、「江戸」とは「廿五万石」の静かな「御城下」の人々には物騒なところでもあったはずだ。そして「坊つちゃん」が、結局は「敗北」してしまうのも、このようなことと無関係ではない。

せっかくの自己証明としてのべらんめい調が「田舎」の人々に通じなかった(注6)というのも、そこでまだ「江戸」が自明の権威ではなかったことを証していよう。

三、侵犯への恐怖

『坊つちゃん』が示しているのは単なる、「江戸」による「田舎」の差別ではない。「江戸」と「田舎」の対立 抗争がそこにはある。<優越性>がまだ保証されてないからこそ「坊つちゃん」は絶えず「江戸」の、有無を言わさぬような勝れたところを言わねばならないのだし、それが目に見える「大きさ」と「力」の強調として現れているのである。

物騒な所だ。今に火事が氷つて石が豆腐になるかも知れない。(六)

「火事が氷つて石が豆腐になる」というような、あり得ないことが起こりうるようなところという想定。そこには想像や計測を許さない、慣れないところへの恐怖がある。おそらくそのような不安こそがテキスト全体に「卑怯」「しみつたれ」(二)というように表象

一見「差別的」発言を吐かせているのだが、これは差別というよりは差別したい欲望の段階の表現と見るべきだろう。ともかくも、そのことを証明できないにもかかわらず、「坊つちゃん」はそのような「卑劣な根性」なるものが、「封建時代から養成した此土地の習慣なんだ」(以上、十)と考えるような根源主義や本質主義に陥ってしまっている。

言うまでもなく、暴力はそのような本質主義にもとづいて発動される。人は暴力を正義と考えるための理由を必要とするし、本質主義はその理由を支えるもっとも強力な理論になる。「江戸」にもまた「封建時代」を通して「養成」された数々の「習慣」はあるはずだが(むろんそれとて本質的なものでも、普遍的なものでも、ましてや統一的なものでもないのだが)、「坊つちゃん」が対抗意識をもつようになったある地域=別の共同体に「勝つ」ためにはまずこのような手続きが必要だったのである。

そして、そのような得体の知れない対象はやがて自己を侵犯するものとして恐れの対象となる。つまり「こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない」というような恐怖を引き起こすことになるのである。それはやがて、「こんな田舎に居るのは墮落しに来て居るやうなもの」(以上、十)というように、<染まる>こと 侵犯への恐怖となって「田舎」の表象を手伝い、正当な差別感情となって落ち着くだろう。

それはやがて、「野だは大嫌だ」としながら「こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまふ方が日本の為だ」(六)「日本の為にならないから、僕が天に代つて誅戮を加へるんだ」(十)とするように、忌み嫌うものたちを<排除>し消滅させるべきものとする排除意識の芽生えをもたらすだろう。

そして、後述するが、彼らの消滅が当の「田舎」のためでなく「日本」のためになると考えることに、国民国家の問題が深くかかわっているのである。(注7)

「教育の精神」として「高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹」と同時に「野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩」(以上、六)することにあるとする山嵐の会議での言葉にもそ

のことは現れる。山嵐には「田舎」の数々の行動様式はあくまでも「矯正」すべき「弊風」であり、したがって「掃蕩」(以上、六)すべきものなのである。

「坊つちやん」が、「田舎」を「不浄の地」と語ることや、「新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出た様な気がした」(十一)とする叙述は、「田舎」が、「人間」がいない、すなわち「娑婆」ではないことを強調してやまない。そこには単なる東京中心主義以上の排除主義が息づいている。そこが「娑婆」ではないからこそ、「坊つちやん」は清に再会しての第一声として「もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだ」(十一)と言ったのだし、おそらくその通りになるだろう。

そのような「坊つちやん」を「異郷での疲労、汚れ、主人公に浴びせられた全ての「不浄」なるものは、母の温もりによって、払拭される」(小谷野純一『『坊ちやん』解析』、『漱石作品論集成 坊つちやん・草枕』、桜楓社、1991・12)のだと考える論者もまた、「異郷」を「汚れ」の対象と見ている点では「坊つちやん」と同じ地点に立っているといえよう。

四、境界・根拠・放浪

「坊つちやん」が「田舎」へ行くことを告げると「箱根のさきですか手前ですか」(一)と聞いていた清なら、「坊つちやん」が処している状況を聞かせると「箱根の向だから化物が寄り合つてるんだと云ふかも知れない」(七)と「坊つちやん」は考えていた。清には「箱根」というところが認識し得る<境界>となっているらしいのである。そして、「坊つちやん」の推測であるにしる、そのように聞く清にとって、認識を超える場所は「化物が寄り合つてる」というような、不気味な場所である。知り得ない他者には恐怖がつきまとい、それは「田舎者は人がわるいさうだから、気をつけて苛い目に遭はない様にしろ」(七)というような忠告として現れる。ここで、「東京のものはみんな利口で人が悪いから用心しろ」(二の一)と書いてよこしていた『三四郎』の母の手紙を想起しておいてもいいかもしれない。

それにしても、「田舎者」は「人がわるい」との認識には、少なくとも今日のような「田舎」に対する幻想は存在しない。田舎 = 自然 = 素朴 = 単純という等式はここではまだ見られないのである。「都会」出身の「坊つちやん」の方がむしろ「単純」で素朴な人物として登場しているということもそのことを立証している。

このようなことから二つのことが言えるだろう。まず、ある地域を「田舎」と呼ぶのは、そこがはじめから「田舎」だからではなく、「都会」によって「田舎」と呼称されて以来のことだということだ。やがて、「田舎」の人たちも、自分たちのことを「田舎」と認識するだろう。しかし、それはあくまでも「都会」による内面化の結果にすぎない。

むしろ、「田舎」認識が昔は存在しなかったわけではないが、それが差別の対象として浮上したのは急速度で変っていく「都会」の「文明」を享受し得なくなった近代以降のことだったと言っていい。そして同時に、「田舎」に対して、たとえば『草枕』でのように「聖化」する視線も並行して生まれるようになるのである。

認識の範囲を超える対象を「化物」の場所と考える恐れは「田舎」を差別するよりも高い強度で、定住者でない「渡りもの」(八)をも排除するだろう。「渡りもの」である赤シャツの弟は「生れ付いての田舎者よりも人が悪るい」(八)のである(注8)。

都会は、全国各地から人々が集まる場所であり、それは以前からの定住者たちに<侵犯>を想像させ、得体のしれないものたちに汚染され、染まることを恐れさせた。「坊つちゃん」が感じた「墮落」への恐怖もまた同様のものにほかならない。そのような意識は他者に同質性を見るよりはつとめて異質性を見出し、「化物」とさえ考えさせる。「由緒ある　つまり素性のはっきりしている　「江戸」が汚されてはならないのである。「坊つちゃん」は、「正直」で「単純」な「都会」っ子の、「曲が」っていて「不純」な田舎の人々を排除したい欲望が「正義」とされる物語である(注9)。

それにしても、このような田舎フォビア小説が喜ばれて読まれたことに注意せねばならないだろう。それが、「国民」統合の時代に、「国民」となるべき人々を選別して提示する作業にほかならなかったと思われるのは、それが絶えず「<不浄>ではない自己自身を構築していく」(注10)過程でもあったからである。漱石自身、「「浮浪者」や「性の知れぬ曖昧者を教育場裏より駆逐するを得べし」(「中学改良策」)という言葉を残していることも示唆的と言わざるをえない。

五、「清」の願望

清が「坊つちゃん」を鼻屑にしていたのはなぜだろうか。「母も死ぬ三日前に愛想をつかした　おやぢも年中持て余してある　町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする」(一)存在であった「坊つちゃん」を清がひいきする理由は彼女自身の弁によれば「真っ直ぐで

よい御気性」だからであった。しかし、「坊つちやん」の言うとおりの「好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらう」はずである。しかし「坊つちやん」は家族に見放されただけでなく田舎へ立つ時見送りにきたものが清だけだったのを見る限り三年間の学校生活においても友人は作れなかったようだ。清の言う通り「坊つちやん」は「可哀想で不仕合せ」(以上、一)な人間かもしれず、「可哀想」な主人への「憐れ」の感情と見られなくもない。それと同時に、「由緒のある」出身らしく「坊つちやん」の「乱暴」を「武士的男性性」(注11)と受け入れてもいたはずだ。

清は「甥」から、一緒に住むことを勧められながらも「仮令下女奉公はしても年来住み馴れた家の方がいゝと云つて応じなかつた」(一)。そしてその「坊つちやん」の兄がその「年来住み馴れた家」を処分してしまった時、「坊つちやん」が「御うちを持つて、奥さまを御貰ひになる迄は、仕方がないから甥の厄介にな」というような留保つきで甥のところへ行っていた。清には血縁よりも「年来住み慣れた家」の方がよかつたのである。そして、そのことこそが「坊つちやん」に執着を見せていた根底にあるものだったと言える。清が「坊つちやん」の将来の家を夢見、具体的なところにまで関心を見せているのはそれがほかならない自分の根拠地にもなるはずだからだ。血縁の甥のところでも清は「北向の三畳」の部屋をあてがわれていたし、それはおそらく「坊つちやん」の家での環境以上のものではなかつたであろう。「裁判所の書記」である甥宅での清の位置はその程度のものだったのである。

だとすれば、ほかに身を寄せるところのない清が、たとえ下女奉公をするにしてもより快適な環境に身を置いておきたかつたとしても不思議はない。結婚せず子供もない明治の下女には身と心のよりどころが必要であつたはずである。だとしたら、家族の中でその「気性」が気に入り、「将来立身出世して立派なものになる」(一)と信じた「坊つちやん」を特別に鼻屑にしていたとしても不思議はない(注12)。また、自らを見取るべき家族を作らなかつた清が「坊つちやん」に「坊つちやんの御寺へ埋めて」ほしいと頼んだのも無理はない。ある意味では、清には入るべき「墓」自体がなかつたともいえるだろう。

「家」を持つ 定住願望は身の寄せ所を必要とするが、それは「渡りもの」にされることへの恐怖から生じる願望でもある。それは清をして「箱根の向こう」を恐れさせ、「田舎者」は「悪い」と信じさせる。それは農耕民族的発想とも言えるのだが、網野善彦によると日本人＝農耕民族というのも作られた神話でしかなく(注13)「渡りもの」や「田舎者」への恐怖自体が根拠のあるものではなかつたのである。

「坊つちやん」が清を好むのは兄が将棋の時卑怯なことをしたからといって「飛車を肩間へ擲きつけてや」るような乱暴さなども気にせず、トイレにものを落としても拾ってきてくれ、「何と云てても賞めてくれる」(以上、一)やうな唯一の対象だったからである。

「坊つちやん」は清を「善人」(七)と考えるが、主人のためなら何でもすること以外にテキスト内にその根拠は示されない。本来は「坊つちやん」は「性差別」を(注14)するだけでなく下宿の老いた女性を「年寄の癖に余計な世話を焼」(八)くと考えるような、年齢差別主義者なのだが、その「坊つちやん」が清にはそのような扱いをしないのも、「田舎」から異常に早く帰ってきてても不審がるどころかただただ喜ぶような、すなわち何をしても無条件に許される対象だからだったと言うべきだろう(注15)。

清と「坊つちやん」の関係は従来に従僕関係とも言え、清像には、みんなが「平等」になって、もはや支配を期待できなくなった<近代>国民統合時代における、元「旗本」のひそかな夢が託されている。

六、「坊つちやん」と日本人

かつて伊藤整は「坊つちやん」に「日本人の諸性格」が現れているとしていた(注16)。「主人公の楽天性、その同情、その無邪気さ」と「他の人物にある日本的な薄汚さ、みみっちさ、卑劣さ、弱小さ、豪傑ぶり」を「実に完全な日本の性格」としたわけだが、当然ながらそこで挙げられる「性格」は「日本」固有のものではない。しかし、「よい」ものが「悪い」ものをやっつける物語として読まれてしまった「坊つちやん」は、そこにある実際の敗北には目をつむり(だからこそ「胸がすくような」(注17)読書体験が可能となる)やがて「日本」の「国民小説」となっていくだろう。それは「江戸っ子」を産んだ「東京」が、「日本」を代表する過程とも一致するはずだ。「坊つちやん」を読んで「痛快」と思うような感想は「江戸」=東京=都会への感情移入を必要とする。もし「田舎」からの反発がないまま読まれてきたのなら、全国民が中流意識をもつように、誰も自らをそこで軽蔑される「田舎」人とは思っていなかったからか、そこにある悪意が読み取れなかったからであろう(注18)。

『吾輩は猫である』においても、苦沙彌先生は担当する中学の学生を批判し、それを受けて猫も「吾輩も日本の猫だから多少の愛国心はある。こんな働き手を見る度に撲つてやりたくなる。こんなのが一人でも殖えれば国家はそれ丈衰へる訳である。こんな生徒の居

る学校は、学校の恥辱であつて、こんな人民の居る国家は国家の恥辱である」(第十回)と言っていたのだが、『坊つちゃん』における排除意識と構造的に似ていることを確認しておこう。

また、実は、「坊つちゃん」が「言葉」を使う=「遂行」することでしか自己の江戸っ子性を表せなかったように、「江戸っ子」というアイデンティティも本質・普遍的なものではないことも想起しておく必要がある。いうならば「日本」も、また絶えずそのような「遂行」の中においてのみ現れる何かである。そういう意味では「坊つちゃん」が「江戸っ子になる」(石原千秋「坊ちゃんの山の手」、『漱石作品論集成 坊ちゃん・草枕』、桜楓社、1992・12)との早くからの指摘はするどいものだったといわねばならない。

注

1) たとえば小森陽一に「典型的な差別小説」(「矛盾としての『坊つちゃん』」、『漱石研究』十二号、1999・10)という発言がある。

2) 若林幹夫は、「幕藩制下の日本では、国土は複数の領邦的な国家である「藩」に分割され、それらが、「隣藩もなお雲山万里を隔てたる外国と一般なりし異様の制度、法律、風俗、習慣」(「大隈重信昔日譚」)をもって分立していた」と指摘しながら、「徳川将軍もそこでは、最大ではあるが一個の領主であったにすぎない」としている。氏によると「全国的に見れば「都」とは何より京都のことであり、江戸は明治の東京のような中心性をもちえなかった」。それがやがて「国土的な規模での土地と身体との関係の再編成を通じて、領邦的な国家の集合体から、中央集権的なひとつの均質な連続空間(=nationの空間)へと変容していく」のである。そして「鉄道は国土の内部の交通諸関係を中央集権的に編成してゆくことによって、東京を「中央」とし、それ以外の地域を「地方」とする国土の求心的な構造を新たに生み出していった」とされるように、「東京」が完全な「中心」となるためには鉄道の整備を待たなければならなかった。(「空間・近代・都市—日本における<近代空間>の誕生」、吉見俊哉篇『都市の空間・都市の身体』、勁草書房、1996・5)

3) すでに片岡豊が「坊つちゃん」に「近代的な都会人のナショナリズム」を見、「東京」を連発することに「<権威>= <力>に対する親近感、もしくは憧憬」(「<没主体>悲劇」、『漱石作品論集成 第二巻 坊つちゃん・草枕』、1991・1)があるとしており、石原千秋も坊ちゃんの「中央意識」を指摘している。(「『坊つちゃん』の山の手」、『文学』、1986・8)

4) 明治以降、「日本の最初の都市や計画法制は対象を東京に限定しただけでなく、他の都市からの適用の要請に関しても、明治いっぱい、そのような贅沢は地方都市には必要ないという姿勢を貫いてい」た。「地租改正」によって「土地の私的所有制の確立、また近代税制の確立といった面によって日本近代史上に」「日本列島のすべての場所は経済的位置が決められる」ようになり、「地図、地価、人口という都市認識の三大情報の把握がなされるようになった。「坊つちゃん」が誇りに思っていた東京の姿は、「東京を花の都パリといちいち比較し、一等道路をブル・バールにならって作れとか、上野公園をプロニューの森にしるとか、具体的イメージを展開」した結果であったのである(以上、藤森照信「解説」413頁 425頁、『日本近代思想大系19 都市・建築』、岩波書店、1990・7)

5) 「江戸っ子とは江戸弁のこと」(松元季久代「坊つちゃん」と標準語雄弁術の時代 - 内向するべらんめえ』、『漱石研究』12号、1999・10)

6) 自己証明としてのベランめい調は「田舎」の人々に通じなかった。注5に同じ。

7) 生方智子は、「四国辺」という空間を否定の対象として見出し、それを暴力的に抑圧することによって自己同一性を獲得する「坊つちゃん」は、植民地を支配することによって帝国主義国家としてのアイデンティティを獲得する「国民国家」日本のアレゴリにもなる」(「国民文学としての「坊つちゃん」』、『漱石研究』9号、1997・11)としている。おおむね妥当な指摘だが、近代日本は植民地にたいしては同化政策を取りながらも同時に差異化をはかることで(十五章参照)彼我の違いを示すことが可能だったので「支配」の対象にしていたが、いわゆる「日本」内部に対してはそのことが不可能だったため すなわち露骨な支配もできず、だからといって同一化も躊躇されたために消滅・忘却・隠蔽の対象とした。そういう点では、「田舎」と「植民地」を同次元の「アレゴリ」とすることはできない。

8) 「流浪者」の持つ「主人がいないー支配されない、粹付けられない、束縛されない」特徴は、「モダニティにとって我慢のならないひとつの条件」(同)だったとし、彼等を定住者たちが「恐るべきものにしたのは」、彼らの「動く自由」「管理の網から逃れる自由を持っていたから」(ジグムント・ボーマン「巡礼者から旅行者へ、あるいはアイデンティティ小史」(『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』53頁、2001・1、大村書店)だとする指摘も参考になるだろう。

9) 松元季久代も、「坊つちゃん」の田舎における行動は「理屈抜きの好悪と一体の感情」

であって「正義」とは異なる」(「坊つちやん」と標準語雄弁術の時代」- 内向するべらんめえ)(漱石研究)十二号、)と指摘しており、佐伯順子も「坊つちやん」の「正義」が「暴力」的であり、武士道的な「男性同盟」(「聖母を囲む男性同盟 「坊つちやん」における男色的要素」、『漱石研究』12号、1999・10)と指摘している。

10) 高原和正・五味淵典・大高智児「街鉄の技手はなぜこの手記を書いたのか」(『漱石研究』12号、1999・10)

11) 佐伯順子、注9に同じ。

12) 片岡豊は、清の「思い入れが<無償>のものであるはずがなく、とすれば清を<聖化>されたイメージで捉えるのもおよそ見当違いなことだといわなければならない」(「<没主体>の悲劇」、『漱石作品論集成 坊つちやん・草枕』、桜楓社、1992・1)としているが、具体的な言及はしていない。

13) 『米・百姓・天皇 日本史の虚像の行方』、大和書房、2000・6

14) 注11の佐伯論文。

15) 「清こそ「親」」(戸松泉「清はなぜ「坊つちやん」に肩入れするのか」、『漱石がわかる。』42頁、朝日新聞社、1998・10)との指摘や前掲の生方の「清は母のメタファー」とする見解は、「甘え」を許される存在という点では有効だが、二人の関係の根っこに支配と従属の関係が隠されていることが看過されている。

16) 伊藤整『現代日本小説大系 16巻』「解説」(河出書房、昭和24・5)

17) 注16に同じ。

18) 『坊つちやん』は、「漱石の作品の中で大衆に一番愛されている作品」(山本健吉「夏目漱石入門」、『日本文学全集6夏目漱石』、河出書房、昭和42・6)、「日本でもっとも知られた文芸作品」(小野一成「坊つちやん」の学歴をめぐって 明治後期における中・下級エリートについての一考察」、『漱石作品論集成 坊つちやん・草枕』、桜楓社、1991・12)とみなされてきた中、「漱石作品群の中では明るい特異な作品として久しくその系譜から除外されてきた」(有光隆司「『坊つちやん』の構造—悲劇の方法について」、『漱石作品論集成 坊つちやん・草枕』、1991・12、桜楓社)として「悲劇」とする見解や「寂鬱感」(相原和邦「坊つちやん」論」、『日本文学』昭和48・2)を読み取ろうとする見解が中心的だった。